

(二〇二〇年度一般入試A問題)

国語問題 (六〇分) (この問題冊子は八ページである。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、携帯電話・スマートフォンの電源は切ること。
- 三、時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の受験番号欄の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、解答用紙は三枚ある。解答は解答欄に記入し、その他の部分に何も書いてはならない。
- 六、監督から試験開始の合図があったら、この問題の冊子が、上に記したページ数通りそろっているかどうか確かめること。
- 七、筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなどを使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以上

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

台風十九号によって国内七十一河川の百四十か所にも及ぶ堤防が決壊し(注1)、再度、自然の災禍が人間の対応力を超える事実を目の当たりにした。

近年の度重なる(ア)「ごうう」の来襲は、各地の河川の(イ)「はんらん」や土砂崩れをもたらし、地球温暖化による環境危機が深刻化している現実を体験的に悟らせ、私たちに緊急の対応を迫っているようである。今度こそは、日本に住む誰もが地球環境にかかわる事柄を、自分の事(以下、「ジブンゴト」と表記)として受け止め、その対応について真剣、かつ、具体的に考えるべきことを痛感したと思う。

(あ)、このような言説は、読み方次第ではすでに二十年以上も前に京都議定書が策定され、いくつもの大震災を経験した国に住みながら、まるで、近年世界各地で報告され続けていた深刻な異常気象や大規模災害の報道を、どこかまだ他人事(以下「ヒトゴト」と表記)として傍観できていた人物の発言のように聞こえる。

グローバル化の時代にあつて私たちは世界で起こる出来事の情報を知ることができ、遠く離れた国々の事柄が自分たちにも影響し、世界は相互に依存し合っていることを実感しつつある。ところが、それらの情報や知識は、ある人にとっては依然として「ヒトゴト」であり続け、自分にかかわる直接の接点が見出せないが、ある人にとってはどんなに距離的に遠い場所で起こる事柄であっても自分にかかわること、つまり「ジブンゴト」として受け止めて考えるための契機となる。

「ヒトゴト」を「ジブンゴト」の課題として認識するためには何が重要なのだろうか。その人々にはどのような動機があるのだろうか。そこで以下に、おおまかな対比ではあるが、西洋と日本の自然観や人間観について考察し、「ヒトゴト」の中に「ジブンゴト」を見出す可能性を探ってみた。

(い)、日本人は(ア)「情けは人のためならず」ということわざを多用してきた。おそらく、日本は災害大国と呼ばれ、その国土面積が全世界

のわずか〇・二八%でしかないにもかかわらず、全世界で起こったマグニチュード六以上の地震の二〇・五%が日本の周辺で起きたからであろう。国土交通省のデータによれば、国内には全世界の活火山の七・〇%が存在し、全世界の災害で死亡する人の〇・三%が日本人であり、また、全世界の災害被害金額の一・九%が日本の被害金額であるという(注2)。さらに、昭和三十年代までは一度の台風や地震で千人以上の人が亡くなることもあった。その後の堤防の整備や地震に対する技術の進歩などによって死者・行方不明者の数が千人を超えることはなくなったが、一九九五年の阪神・淡路大震災では、死者・行方不明者が六四三七人、二〇一一年の東日本大震災では二万人を超える被害(注3)を経験したのである。

(う)、この国に住むということは、いつ、どのような天災が「ジブングト」となるのか分からないリスクの中で生活することを意味する。そのため、日本人は災禍に見舞われた経験のあるなしにかかわらず、被災者の苦しみや痛みを「ジブングト」として受け止め、ボランティア活動に駆けつけ、募金や支援物資の調達に協力する気風を伝統として育ててきた。

ところが、ある日、一人のヨーロッパ出身の友人が、「それほど災害が多いことが分かっているのに、なぜ、いつまでもそんな危険な土地に住んでいるのか」と問い、①筆者を驚かせた。確かに、危険(ウ)かいひのためににより安全な場所へ居を移すことが最も有効な手段なのかもしれない。しかし、筆者にとって予想だにしなかった選択肢であった。寺田寅彦氏の述べるように、平時における日本の自然は多種多様な恵みをもたらす慈母のよくな大地であり、「慈愛が深くてその慈愛に対する欲求が満たされやすいために住民は安んじてそのふところに抱かれることができ」(注4)るからであろうか。それとも、冒険心やチャレンジ精神に欠けるからなのであるか。日本の先祖たちはどうであったのだろうか。他の土地を探そうにも文明が未発達な時代には、海に囲まれた地形は移動を(エ)はばんだであろうし、天災以外にも戦争や飢餓で命を失う危険もあれば、突然の怪我や伝染病で亡くなることもある。世界のどこに住むとしても人間の一人ひとりの生命が弱くはかない現実には変わりはない。有限性は人間の本質的特徴の一つであるのだから、死ぬべき運命そのものにむやみに抵抗しても詮無いことであり、むしろ、与えられた場所で限りある命をまつとうする方法を見出すことが肝要であると考えたであろうか。寺田寅彦氏によれば、日本人は「自然の充分な恩恵を(一)甘受すると同時に自然に対する反逆を断念し、自然に順

応するための経験的知識を集積し蓄積することをつとめ」て来たのである(注5)。そして、このような行動様式により、上位の権威や力に従順し、周囲の変化に注意深く気を配りつつ敏感に反応し、繊細さや(2)緻密さを追求しながら勤勉に働く国民気質を身に付けてきたのである。

その点、西洋における自然は日本の気候風土ほどには人間を打ちのめすものとはとらえられていないと言える。そのため西洋の人々は自然を一つの対象として観察し、その中に規則性や因果性を見出し、自然を利用する方法を試行することができた。また、キリスト教の影響もあり、人間には動物以上の優越性と価値を認め、その知性と科学技術を駆使して自然の力を管理する役割の中に使命を見出してきた。更に、個々の人間についても人格という概念を当てはめ、その平等の価値と尊厳を認めるとともに、主体性や自由を発揮して自己実現を図る人間観を形成してきたのである。②その意味では、このような自立的人間観を異質に感じる日本人は多いのかもしれない。そして、そのような発想の違いの原因を、交流する相手の個人的性格や人柄の問題として片付けるのではなく、両者の国民性や文化的特徴の分析的な考察へと発展させるきっかけとする人もあるのだろう。観光旅行のような場合とは異なり、日常生活をともしる中で生じる様々な摩擦や衝突は、互いのある文化的多様性を(3)顕在化させる一因となり、人間関係に(4)亀裂を生じさせることもあるが、両者に独自性の自覚を促す契機ともなる。

今、日本人の多くは「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉を思い出し、様々な振り返りをしていることだろう。敗戦から七十年以上が過ぎ、西欧列強に追いつくための国家再建の努力は、一応の社会的平和を確保できる段階に至っている。にもかかわらず、今、その生活基盤そのものである自然は、その驚異的な力を発揮することである種の(オ)けいしようを鳴らしているかのようなのである。災禍の後で振り返れば今までの防災対策は、本来、想定内に設定すべき事柄を想定外へと追いやって策定された不十分な計画にしか見えない。確かに、いつ起こるとも分からないリスクを防ぐために莫大な経費を費やす決定を下しつつ、社会全体の発展を維持する政策を遂行することは誰にとっても困難(5)極まりない作業であろう。しかし、そのような先の見えない難題であればこそ、人命尊重という価値をどこまで優先させて考えるかという根本姿勢と意志が問題になる。

企業や組織に存続の危機をもたらすようなリスクが過小評価される現象について研究している長瀬勝彦氏は、天災のリスクはもともと過小評価され

る傾向にあると述べ、そのようなリスクの特徴を左記のように分類している(注6)。

過小評価されるリスクの特徴

1. 感情に訴える鮮明なイメージを喚起しにくい。
2. リスクの存在が距離的に遠く感じられる。
3. 起こる確率が比較的小さく、起こるとしても遠い先に思われる。
4. 緊張状態を保つ意味でのリスクに晒されている時間が長すぎるために、危機感が自覚されにくくなる。
5. リスクを予防するためのコストとその際に得られるベネフィットは本来両立が困難である上に、適切に数値化することも難しいため、リスクは相対的なものと見なされ、結果としては過小評価される。

天災はスズメバチの群れに襲われる時のような咄嗟の判断や行動力で対処すべきリスク1とは異なり、分析や論理的思考を巡らせて対応する社会的リスクと同種のリスク2に分類されるもので、通常、右記のような特徴を理由としてそのリスクは小さく見積もられる。更に、こうしたリスクの過小評価は、人間が「自分の願望に合致したデータだけに注目する」確証バイアスを持ち、「不確かな状況下では、周囲のみんながとっている行動が正しい対処であると考える」社会的証明の原理も影響することが述べられている。つまり、起こって欲しくないリスク、直接見えにくいリスクは小さく見積もり、周囲の人びとが特別の行動を始めない限り、自分一人の考えだけで判断を下して行動することは難しいという訳である。

(え)、このような人間一般に共通する傾向や認知バイアスの存在を知った上で自分に問いかけるならば、右記の情報は自分の現実認識に何らかの変化をもたらさだろうか。人間性の特徴や本質にかかわる考察は、同じ人間である自分にも当てはまる事象に気づかせ、少しは身近なテーマになるだろうか。その気つきは従来の自分自身の行動基準を客観的に吟味する視点を与え、将来計画を見直す動機となるだろうか。

今の答えがイエスでもノーでも構わない。ただ、「ヒトゴト」を「ジブンゴト」の課題として認識するセンスとは、このような質問を自分に問い続

け、自分なりの答えを見出す過程を繰り返すことで身に着くもののではないだろうか。様々な立場の人びとの利害が複雑に絡み合い、容易には解決の糸口さえ見つからない遠い世界の難題であっても、それを「ジブンゴト」に置き換えて考察し、優先すべき価値は何か、その価値の実現をどこまで追求すべきかについて、自分自身の根本姿勢と態度を定めていく経験の積み重ねが求められるのではないだろうか。

人間の手には負えない自然の威力に繰り返し襲われてきてはいても、日本に住み続けてきた先人たちは③ 運命論的な絶望 に陥ることはなかった。

(お)、この自然の中に生存が許されている存在であることを感謝し、自然を師として敬いつつその営みから学ぼうとする態度で、自然に適応する道を探り続けてきたのである。また、個人の生き残りを考えるのではなく共同体全体として生き残る道を目指し、「ヒトゴト」はまた「ジブンゴト」でもあるという想像力と感受性の中でも生きるための工夫を重ねて来たのである。

その意味では、(B) 日本における思想も、西洋の思想とは別の道筋をたどりながら「他者のために、他者とともに」生きることに価値を見出してき たと言える。 どんなに多くの災禍に見舞われるリスクを抱えていようともこの国での生活を諦めず、むしろ、天災がもたらす無常やかなしみも含めて、助け合い、今、ともに生きる命を喜び味わうことに価値を置いてきた。 大切な人々の生命や財産が一瞬のうちに奪われる衝撃に押しつぶされそうな人々を支えるのは、物質的な支援だけではなくその思いを「ジブンゴト」として感じながら寄り添う人々の存在である。 地域的な距離や異文化間の壁を乗り越え、互いの心にまで届く橋を架けようとする作業は、忍耐強く複雑さに耐える地道な努力が求められる長い道である。

注1 国土交通省、令和元年台風第19号による被害状況等について、堤防決壊箇所一覧 (<https://www.mlit.go.jp/common/001313204.pdf>) 二〇一九年十一月三日参照。

注2 一般財団法人国土技術研究センター「国土を知る 意外と知らない日本の国土」より。 (<http://www.jtce.or.jp/knowledge/japan/commentary09>) 二〇一九年十一月三日参照。

注3 同右。

注4 寺田寅彦「日本人の自然観」(1935)『青空文庫』 (https://www.aozora.gr.jp/cards/000042/files/2510_13846.html) 二〇一九年十一月三日参照。

注5 同右。

注6 長瀬勝彦「リスク認知のバイアス…なぜリスクが過小評価されるのか」(2012)『組織科学』Vol.45, No.4, pp.61-64.

(<https://www.aaos.or.jp/contents/committee/file/045-4-6.pdf> 二〇一九年十一月三日参照)。

問一 傍線部(1)から(5)の読みをひらがなで書きなさい。(配点各一点)

問二 傍線部(ア)から(オ)を漢字に直しなさい。送り仮名のあるものは送り仮名も書きなさい。(配点各一点)

問三 (あ)から(お)に入る語として適切なものを次の中から選び、その記号を記しなさい。なお、同じ語が二度用いられることはないものとする。(配点各一点)

- A. 実に
- B. では
- C. しかし
- D. さて
- E. むしろ

問四 傍線部①筆者を驚かせた理由について、文脈から読み取れる筆者の意見と異なるものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

(配点五点)

- 問五
- 傍線部② その意味では、とはどのような意味なのか、筆者の意見に最も近いものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。
- A. 伝統が刻まれた土地に対する愛着を持たない人の発言に聞こえたから。
 - B. 未知の世界の危険を顧みずに行動できる人の発想に聞こえたから。
 - C. 自由に自分の行動を決める自立した精神の持ち主の発言に聞こえたから。
 - D. 日本人が自然に適應するために払ってきた努力を評価しない人の発言に聞こえたから。

(配点五点)

- A. 西洋の自然は、日本人が経験してきた自然のような猛威を振るう存在ではない。
- B. 西洋人と日本人とでは、体験してきた自然のイメージが大きく異なる。
- C. 自然観と人間観は、体験を通して形成されるイメージによって相互に影響し合う。
- D. 人間観は、環境として経験される自然観による影響を受けて形成される。

問六

傍線部③ 運命論的な絶望 について、筆者が特に批判的な意見を抱いているものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

(配点五点)

- A. 天災やこの世の不条理は運命によって定められた人に訪れるが、人間は個人的努力をすべきである。
- B. 自然災害は一定の法則に基づいて必然的に起こるのであるから、人間の力で防げることは何もない。
- C. 突発的に豹変する自然環境の中では人間らしい安定した生活は望むべくもないから、その土地を見限るほうがよい。

D. この世に起こることはすべて因果の法則に因るのであるから、人間の意思が影響を及ぼすことはできない。

問七

傍線部(A)「情けは人のためならず」ということわざを多用してきたについて、その理由を筆者がどのように考えているのか、六〇～七〇字でまとめなさい。(配点五点)

問八

傍線部(B)「日本における思想も、西洋の思想とは別の道筋をたどりながら「他者のために、他者とともに」生きることに価値を見出してきたと言える」について、まず、(1)日本における思想が『他者のために、他者とともに』生きることに価値を見出してきた「道筋」について、六〇～七〇字で説明しなさい。次に(2)西洋の思想が『他者のために、他者とともに』生きることに価値を見出してきた道筋について、六〇～七〇字で説明しなさい。最後に、(3)筆者の意見に対するあなたの考えを、理由を挙げ、六〇～七〇字で述べなさい。(配点十五点)